

編集後記

毎年、多文化共生研究所所員が客員共同研究員も含め、増えている。非常勤講師の方を含め、どんどん増えている。数年前から規制緩和で大学院生にも指導教官の許可や指導があれば投稿のチャンスが与えられるようになった。多文化共生研究所は大学院国際文化研究科に附置された研究所と位置付けられている。おかげさまで2019年で10周年。稲村哲也名誉教授（初代所長）から杉山三郎名誉教授（第2代）、そして今は小池康弘教授が第3代目所長となり、多文化共生研究所の活動を引っ張ってこられた。初代、2代、3代と書くと、まるでどこかの組の、ヤクザの親分のようにも見える。

多文化共生研究所が扱ってきたテーマは多岐にわたる。稲村哲也先生が招聘されていたアイヌ民族など国内の少数民族や、杉山三郎先生のメソアメリカ先住民の古代研究、亀井伸孝先生のアフリカ先住民やろうあ者の研究や、小池先生が共同で行われている国内の外国人との多文化共生問題など（医療通訳ボランティアも含む）、多岐にわたるテーマで、さまざまな角度から、多文化共生問題について取り組んできた。私も北米や南米の先住民研究を行いながら、北米インディアンの語り「虹の戦士」なども招聘してきた。

個人的な話になるが、最近私は、日本国内のヤクザの社会学的研究を、もっぱら社会更生運動の視点から行っている。刑務所や少年院を出所した人々がどのように自立更生を図っていくか、さまざまな支援の手が必要だ。反社会的組織に入る人々のほとんどは、貧困家庭や親による育児放棄など、幼少時の家庭環境に問題があり、心が荒んだまま、大人になってしまった人々だ。彼らは反社会的な組織活動をし、罪に問われ、刑務所に入る。しかし、刑務所内で更生した後、自立更生するのがなかなか難しい。

最近知り合いになった青木康正氏は、元ヤクザの組長で、人生の半分（30年以上）を刑務所で暮らしてきた。彼は徳

島刑務所で敵の組織に狙われ、頭を鈍器で殴られ、九死に一生を得て病院送りになり、熊本刑務所にひっそり移送された。その後聖書に会い、刑務所内で洗礼を受け、改心した。出所後、教会で一年間奉仕し、5年前NPO法人「オリーブの家」を熊本で設立した。青木氏は、刑務所や少年院から出てきた更生意欲のある人を半年間受け入れ、宿と食事を提供し、ハローワークで一緒に仕事を探し、自立のための支援をされている。彼に世話になった人々はこの5年間で90人。その全員と青木氏は、毎日交換日記を行い、励ましてきたそうだ。刑務所を出て、行くところがない80代、90代の高齢者も、彼のところに「半永久的に」お世話になる。そんな高齢者のために、青木氏は半年前からグループホームも始めた。そのうち一人は、最近看取られた。「オリーブの家」は、まるでマザーテレサの「死にゆく人々のための家」のような機能も今や果たしている。

どんな人も差別されずに多様性を認め合い生きられる社会、それが多文化共生社会だとすれば、青木氏の行っている更生者の自立支援活動や行き場のない独居老人のターミナルケアも、そのような活動ではないか。そしてそれは、多文化共生の最前線の研究対象になるのではないか。そう個人的には思っている。

なお、今号から『共生の文化』のレイアウトが刷新された。多文化共生研究所付きの有能な事務官、阿部幸穂さんの素晴らしいデザイン・センスと編集能力のおかげである。イベントのポスターやチラシも毎回素晴らしい出来で、所員を代表して阿部さんに感謝したい。

文責：谷口智子（愛知県立大学外国語学部准教授、『共生の文化』編集委員）